

海音寺潮五郎

柳沢騒動



時代小説文庫 162

柳沢騒動

平成元年一月三十日 初版発行

著 者 海音寺潮五郎

発行者 中井茂雄

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五（代表）

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 新興印刷 製本所 多摩文庫

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

時代小説文庫

162

富士見書房

柳沢騒動

海音寺潮五郎

席次

一

貞享^{じやうきやう}三年正月、柳営^{りゆうえい}年賀の日である。

諸大名旗本総登城の式日^{しきじつ}なので、広いご本丸もひどく賑わっていたが、さすがに大廊下の間は三家方^{けがた}と甲府家の詰所^{つめしょ}になっただけに、しんと静かであった。

紀州綱教卿^{つなのり}は退屈^{たいくつ}しきっていた。元服こそしているが、綱教卿はやっと十一歳にしかなくなっていなかった。上座^{じやうざ}の尾州光友卿^{びしゆう}は六十二歳の老人であり、自分の次席に坐っている甲府綱豊卿^{つなとよ}（後に六代將軍家宣^{いえのよ}となる）は二十四歳の壮年であり、ご相手に出ている老中らも皆大人であり、挨拶が済むと、もう何にも話がないのである。

最初のうちは、綱教卿は、色の白いふくらとした顔に黒い眼をみはって、人々の話に耳を傾けていたが、大人同士の会話はわからないことばかりが多くて、すぐ厭^{いや}になった。退屈げに、襖の絵を見たり、声も立てず音も立てず、影法師のようにひっそりと茶の給仕をしたり火を持って来たりして、立働いているお坊主共の青い頭を見たりしていたが、間もなくそれにも飽^あいたので、今度は自分勝手な空想に耽^{ふけ}ることにした。

先ず考えたのは鶴姫つるひめのことであつた。

鶴姫は、現將軍綱吉の娘で、綱教卿の北の方である。十一歳の少年が妻帯しているといふことは現代の我々には異様に感ぜられるけれども、当時の上流階級にはそれほどめずらしいことではなかつた。鶴姫は一つ違いの十歳であつた。婚約はずっと前、綱教卿が五歳、鶴姫が四歳の時から出来ていたのを、昨年興入れこし入れして来たのである。

勿論、二人ともに人事を解する年頃ではないので、名のみ夫婦——ままごとの夫婦のようなものであつたが、表立って夫と定まり、妻と定まってみると、子供心にもおのずから情愛は湧いた。

(どうしているであろう——)

正月のことだし、いつにもまして美しく化粧して女雛めびなのように端然と坐つて女中らの祝儀を受けている頃だと考えた。

女中らの美しい着物の模様や、色彩いろどりや、櫛くしや、笄こうがいのきらめきや、脂粉の香や、微かすかな酒の酔いに華やかになった声や——一時に思い出されて、色のある美しい霞にでも包まれたように、身中みうちがぽつと温かくなつて、無暗むやみに屋敷に帰りたくなつたが、儀式が済まない以上、そんな我儘なことの出来るはずのものではなかつた。

「帰つたらすぐ奥へ行こう」

歌がるたや、仕舞や、能楽や——奥で女中らを相手にして遊べるかぎりの遊戯を次から次へと想い出しては楽しんでいたが、ふと、光友卿みつともが、

「水戸殿は遅うござるな」

と言ひ出した言葉に、楽しい空想の糸は断れた。

水戸殿――

と聞いただけで、綱教卿は胸に真黒な雲が蔽いかぶさつて来るような厭な気がした。水戸殿はきびしい人だ。老人に似合わず、することにも、言葉にも圭角があつて、人の過失など微塵も容赦しないような厳格なところがある。こういう老人は決して子供に好かれるものではないが、綱教卿には特別に水戸殿を嫌うわけがあつた。

「さよう、いつもお早い方でござるに、今日はまたいかがなされたのでござろうか。まさか、ご病氣と申すのではありますまいな」

綱豊卿が答える。これはまた心配げな調子であり、自分の老父のことでも話しているようななつかしげなところさえある。これにもわけがある。

同じ理由が、綱教卿には水戸侯を嫌わせ、綱豊卿には水戸侯を慕わせているのである。

「さようなことはござるまい。――どうだな、ご病氣ご不参というのではあるまいな」

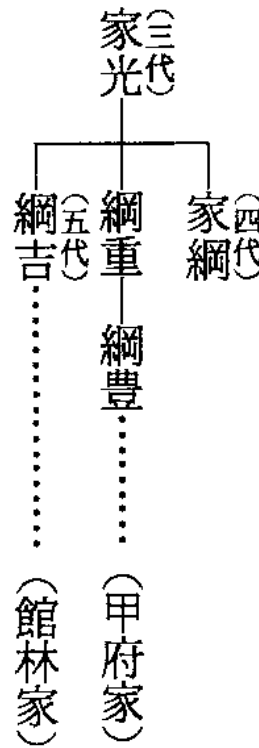
光友卿は接待の老中にたずねた。老中は水戸家から何のお届けもない故、やがてご出仕なさるであろうと答えた。

間もなく、話は、水戸侯のことを離れて他の方に向つたが、綱教卿の不快になつた心は、いつまでもそこにしがみついていた。

なぜ、水戸殿が綱教卿にとって不快な人となったか――

事は將軍の継嗣問題けいしに関係している。

四代將軍家綱が死んだ時、綱吉は館林家たてばやしけから入って五代の將軍となったが、これは、次兄の甲府綱重が死んでいたからであって、もし綱重が生きておれば、綱重が五代の將軍となるはずであった。



こういう系図になっているのである。

水戸侯光圀みつくには、自分でも、兄頼重を超えて家を継いだことを心苦しく思っこて、自分の後嗣あとつぎには、実子があるのに、頼重の子綱条つなえだを貰もらってすえたほどの人なので、綱吉將軍も自分の後嗣には兄の子である甲府綱豊を立てるであらうと予期し、そうさせねばならぬとまで思いこんだ。

ところが、綱吉はそうすまいとした。綱吉は綱豊の父綱重がきらいであった。兄弟ではあるが、性格が合わなかったためか、それとも、幼い時から事毎ことごとに張り合うように育てられたためか、いい感情を持たなかった。従って、その子の綱豊に対しても親しみを持つことが出来な

った。

將軍になると、綱吉は自分の子の徳松を世子として西の丸に入れた。勿論、光圈は正面切つて異論をとねえたが、綱吉は強引に押し切った。

それから三年――

その徳松が病死したので、曲りなりにもともかくも納まっていた世子問題が再燃することになった。

綱吉將軍は、丁度その頃、徳松の姉の鶴姫と婚約の出来た紀州綱教に意を傾けて、側用人の牧野成貞を尾州家と水戸家につかわして、こう相談させた。

「この度、鶴姫様には、紀州家綱教卿との間に婚約がとまりましたが、つきましては、姫君ご幼少のことなれば、綱教卿を二の丸にお入れ申してご婚儀遊ばされることにいたしたいとのご上意でございますが、いかがでございますようか」

勿論、綱吉の真意は明瞭だ。こうして、入婿のような形で綱教を迎えて二の丸に置き、あまりめだたなくなつたところで、改めて世子に直す、という肚なのである。

人並すぐれて鋭い光圈である。どうしてもここに気づかないことがある。一議に及ばず反対した。

「それはよろしくあるまい。姫君はご幼少にもせよ、立派な附人もあること故、紀州邸でご婚儀なされてもお気づかないことはあるまい。お城でご婚礼なされると同じようにご安心なすつてよろしい。どうしてもご心配とあらば、姫君はまだご幼少なのだし、ご心配のない年頃に

ご成人なさるのを待ってご婚礼されても遅いことはないと思存する。その上、紀伊殿がお城へ入ってご婚礼なされるのは差支えないといたしても、いづれ、姫君ご成人の後にはお城を出て屋敷にお帰りにならねばならぬわけだが、考えてみると異なるものに見えはせぬかな」

今度は光圀みつくにが勝った。理の当然に、綱吉は押し通すことが出来なかった。

それから、更に四年目――

去年の二月、いよいよ婚儀が行われて、鶴姫が紀州家けしゅうへ迎えられて間もなくのことだ。牧野成貞からまたご三家に対して相談をかけた。

「ご承知の如く、上様うへさまも今年で四十におなり遊ばされましたが、徳松様以後、若君様しゅつご出生しょうがございません。上様も常におさびしく思召おもほしていらせられるように拝しますが、つきましては、ご養君をなされたらばと存じますが、いかがなものでございましょうか」

光圀みつくには先ずたずねた。

「それはご上意じやういか、それともその方の考えか」

言うまでもなく、將軍の密意をふくんでのことではあったが、またこの前のように反対を唱えられて引っこめるようなことがあつては將軍の威光に関すると思つたので、牧野は、

「ご上意ではございません。てまえ一人の料簡りょうけんで申上げているのでございます」

と答えた。すると、光圀は言った。

「ご養君の心配などまだいるまい。四十と申せば、まだご老年というほどのお年ではない。もう若君がお出来にならんとはいきってしまうのは早計そうけいと申すものだ。また、万が一にも、お

出来にならんとしても、ご養君になるべき人に事欠かれるようなことは決してない。先ず甲府殿がおられる。この方をお立てになるのが最も順に叶うたものと存するが、その甲府殿をお立てになることがどうしてもお厭だということなれば、その次には尾張殿がいらせられる。尾張殿をお厭ならば、三番目には紀伊殿がおられる。紀伊殿もお厭とならば、不肖ながら、わしの子の綱条つなだがおる。ご養子など、そうあわててお立てにならんでもよろしい」

これは光圀の痛烈な皮肉であつた。綱吉に対して、養子を選ぶ順序を教え、紀伊侯綱教つなのりの継承順は三番目であることをあてこすつたのであつた。

今度も光圀が勝つた。養君問題はまた立消えになつた。

——以上が、綱豊卿が光圀卿を慕い、綱教卿が光圀卿を嫌う原因であつた。勿論、子供である綱教卿に、ほんとの水戸侯がわかるはずはなかった。家来共や、女中共の言うままに、意地悪で、変屈へんくつで、とりわけ、自分に対しては悪意を持っている老人だと信じこんでいたのである。

三

遠い所に警蹕けいひつの聲が聞えた。

「ああどうやらいらせられましたらしゅうございます」

老中がそう言うより早く、坊主共は外に迎えに出た。

「水戸様しゅつしご出仕」

役人の前まへぶれと共に、光圀卿みつくには入って来た。いつになく上機嫌だ。皺しわんでこそおれ、若い頃、

江戸一の美男と言われた^{おもかげ}俤の残る端正な顔に、にこにこ微笑を浮べている。だが、それを見た時、どうしたことであろう。綱教^{つなのり}卿は、不思議な予感にはっと胸がおびえた。

「これはこれは、意外な遅参いたしましたな。が、上様^{しやうさま}ご出御^{しゆつぎよ}までには、まだ間がござろう」

と言いながら、光圀卿は上座の尾張侯の前に行つて挨拶した。

「お久しぶりでござる。お変わりもなくご健勝の御様子で」

光友卿もほどよく挨拶を返す。

光圀卿が向き直つたので、今度は自分に対して挨拶をするのかと思つて、綱教卿は心構えしたが、光圀卿は目もくれないで前を通り過ぎて、末座の綱豊卿の前に行つて、ぴたりと坐つた。

「お久々でござりまする。いよいよご安泰のご様子、光圀^{ちんちやう}珍重に存じまする」

鄭重を極めた態度であり、言葉である。尾張侯に対する挨拶も相当には丁寧だったが、これはまた君臣の礼にもまがうかと慇懃^{いんきん}を極めているのである。居合わす人々、尾張侯も、老中らも、お坊主共も、皆、啞然としてしまった。当の綱豊卿ですら、あっけに取られて、もごもごと返事を口ごもつた。

光圀卿はあくまでも真面目だ。微笑は消えて、肅然たるつつしみをもつてうやうやしく言うのである。

「さて、これまでは、手前も失礼をいたしましたでしたが、今日よりいささか存ずる^{しきい}子細^{しさい}ござりますれば、あれへご着座くださりますよう」

辞退する綱豊を無理に、自分の座席と定まった光友卿の次に坐らせた上で、はじめて、綱教卿の方を向いた。

「紀州殿、少しお席をお譲りくださらぬか」

ご三家の柳営りゅうえいに於ける席次せきじは、普通の大名と異ちがつて、禄高や官位に関係なく、家を相続した年次順によるのがきまりである。しかたはなかった。綱教卿はそれまで甲府卿の坐っていた席に退いたが、急に泣きたいほどの口惜くやしさがこみあげて来た。

（皮肉なことをなさる）

気の毒そうに自分を見ている老中ろうじゆうや坊主共に氣をかねて、顔に出すのは見苦しいと思つてこらえたが、青ざめて来るのが自分でもわかった。涙がにじんで来た。唇がひとりでにふるえて来た――

「いや、ご造作ぞうさくご造作。恐れ入る。紀伊殿もお変りもなく結構でござるな」

刷子はけついでの如く挨拶して、光圀卿は、何事も起らなかったかのように、至極澄まして、のどかな調子で尾張殿と世間はなしをはじめた。

四

「疲れた、疲れた」

女のように美しい頸筋くびすじを見せて、一枚ずつ小姓のささげる着物を取つて、綱吉は平服に着換えていた。これから、小姓らを相手に、好きな能楽でも一二番演じた上で、くつろいだ酒宴で

も催そうというつもりであった。

彼は、若い時、美少年ばかり愛して、女には見向きもしないで、母の桂昌院けいしょういんを心配させたという履歴を持っているだけ、今でもなかなかの美少年好きで、気に入った者がいると、相手が大名の子弟であろうと、旗本の子弟であろうと、権威にまかせて小姓に差し出させたので、大奥に美女が充満していると同様に、彼のふだんの住居である中奥なかおくには、林のように美少年が集まっていた。男寵だんちゆうは当時の風習だったから、一概に彼を以て性格破産者ということは出来ないが、それにしても、かなりに度外れであったといわねばならぬ。

「やれやれ」

着がえがすんで、居間に出ると、典医が薬湯を捧げる。程よく温めて、服し加減である。一口二口飲んでいると、年頃、二十八九の色の浅黒い、ひきしまった顔をした、たけの高い男が入って来て、うしろの方に手をついた。

「申し上げます」

疲れているので、ゆっくり休息しようと思っていた綱吉は、何か政治向きの用で入って来たかと思つて、険しい顔でふりかえつたが、相手が誰であるかがわかると、やさしく微笑した。近頃、一番気に入っている柳沢弥太郎であった。

弥太郎の家は元来幕臣であつたが、弥太郎の父の時、新たに出来た館林家たてはやしづきの臣とせられた。弥太郎は少年の時から綱吉に仕えた。少年時代、綱吉はその美貌の故を以て弥太郎を愛したが、青年以後はその才智とすぐれた性質の故に愛した。弥太郎は、決して俊敏しゅんぴんとか捷疾しやうしつとか

いう性質ではなかった。どちらかと言えば、口数はすくないし、おっとりとして落ちついていて、ちよいと見には鈍重どんじゆうのように見えたが、仕事をさせて見れば目立たないようでありながら、早いし、手落ちがないし、口を利かせれば、短い言葉でちゃんと要領をつくした。こういう男なので、はじめは父からゆずられた百六十石の知行所ちぎようしよと三百七十俵の廩米取りに過ぎなかったのを、十年ほどの間に二千三十石の知行取りにし、この暮には従五位下出羽守に叙任じよにんさせたのである。弥太郎は言う。

「唯今、ご母公様より、至急のご使者がございまして、お目にかかりました上で、ぜひにお話し申したいことございますれば、お手すきでございしますなら、大奥の方へお入りお願いいたしたく存ぜられる由、申し越されましてございます。小谷こやの方様かたもご母公様の許にいらせられておられますとのこと」

小谷こやの方かたというのは、綱吉の第一の側室お伝の方のことである。

「そうか、すぐまいると申せ」

綱吉は非常な我儘者わがままだったが、母桂昌院に対しては理想的な孝子であった。少年時代、彼は將軍連枝れんしとして最も位置の高い大名でありながら、自ら母の配膳までしたと伝えられているほどである。母の命に対して、彼の違背いはいしたことは一度もなかった。

柳沢弥太郎はつつしんで出て行こうとしたが、急に綱吉は呼びとめた。

「出羽」

「は」

「どんなご用か、使いの者は申さなんだか」

「はい、紀伊殿のことについてではおわすまいかと、ご使者の女中衆は申しておられました
が、しかとしたことは存じませぬ」

「紀伊殿？」

綱吉は首をひねったが、すぐ、

「よし、行け」

そして、支度をするために、立上った。

急 所

一

綱吉の母桂昌院はこの時六十歳になっていたが、ふっさりと切下げた髪は真黒で、量も多く、
顔色も艶々と美しく、うち見たところ、まだ五十にも遠い人のように見えた。

この人ほど幸運な女性は外に例があるまい。京都の名もない担^{かつ}ぎ売りの八百屋の娘から、天
下の大將軍の母公と仰がれ、女の身で従三位^{じゆさんみ}（後に従一位）の位までいたたく身となったのだ。
しかし、この幸運も、桂昌院にしてみれば、半ばは自分の努力で贏^かち得たものと思っ
てゐるかも知れない。

なぜなら――

綱吉は若い時にはひどく評判のよい人であった。好学にして士を愛する賢公子であるという噂の高い人であったが、そうした噂の立つように働いたのは桂昌院であったからだ。彼女は綱吉に向つては学問を奨励し、世間に向つてはその篤行を吹聴し、有能の士のあることを聞けばこれに賜与を吝まなかつたのである。

勿論、これは桂昌院の母性愛がさせたことには相違ないが、一面から言えば、甲府綱重に対する競争意識がさせたことだとも言える。綱重も綱吉と同じく妾腹の子ではあるけれども、綱重は家光の姉天樹院（千姫）の養子ということになっていたので、どことなく世間の見る目が重かつた。しかし、綱吉には、頼るべき閥族とては一軒もなかつた。桂昌院としては、綱吉を綱重に対抗させるためには、綱吉を賢く育てると共に、世間の評判を煽つて、世人をして綱吉に思いつかせるようにするより外はなかつたのだ。

運命は、桂昌院の最初望んでいる以上の幸運を恵んで、綱吉を五代の將軍とした。これは、家綱將軍に子がなく、綱重が早死したためであることは勿論だが、桂昌院に見れば、自分の努力の結果が報いられたと考へないではいられた。事実、その気味がないとは言へなかつた。それは、綱吉が立つや、世が歡呼してこれを迎えたことによつてもわかるのである。

將軍のご母公というだけでも、仲々の勢いであるものなのに、こういう桂昌院である。そして、將軍は無類の孝子である。桂昌院の威光の凄まじかつたことは知るべきであらう。

小谷の方は、本名をお伝といった。これも素性は賤しがつた。ご本丸の黒鯨の者――庭掃除